

# 「法華経」における平等思想——SGIの視点

栗原 淑江

## 1 はじめに

仏教思想の特質の一つに、平等の概念がある。ブッダが生きた当時のインドでは、カースト制度に根ざす差別が行なわれ、女性蔑視の風潮も優勢であった。そうした中で、ブッダは、カースト制度を否定し、すべての人々が平等であると説いた。仏教は、創始当初から、平等思想をその特質としていたのである。

ブッダの言葉に、次のようなものがある。「身を稟けた生きものの間ではそれぞれ区別があるが、人間のあ

いだではこの区別は存在しない。人間のあいだで区別表示が説かれるのは、ただ名称によるのみ<sup>(1)</sup>であると。

また、「生れによって〈バラモン〉となるのではない。生れによって〈バラモンならざる者〉となるのではない。行為によって〈バラモン〉なのである。行為によって〈バラモンならざる者〉なのである<sup>(2)</sup>」ともある。

このように、ブッダは、すべての人はその属性によって差別されるべきではなく、行為こそが重要であると考えた。皆、同じく「仏性」を内包した存在であり、等しく尊厳な存在であると説いたのである。

そうした思想は、たとえばブツダの女性観にも一貫している。当時のインド社会においては、多くの女性は家庭や男性に従属して一生を送り、一人前の人間としては扱われず、権利や行動も大きく制約されていた。在家の女性信徒に対するブツダの指針には、そうした通念ののつとつたものも多く見られるし、男僧の修行の邪魔になるとして女性を忌避する教えも多い。

しかし、ブツダは、宗教的資格においては両性の宗教的平等を主張している。女性の宗教的資質や能力そのものを否定してはいたわけではないのである。たとえば、ブツダは、自ら説いた法を車にたとえ、「このような車に乗る人々は、女であれ、男であれ、実にこの車によって、ニルヴァーナ〔涅槃〕の近くに<sup>3)</sup>いる」と述べている。

「法華経」は、こうしたブツダの思想にもとづき、すべての衆生の平等を明確に示している。そこで説かれる「一仏乗」の思想は、「すべての衆生が平等に成仏することができるといふ、『法華経』のもつとも重要な宗教的メッセージである<sup>4)</sup>」。

さて、現代に展開するSGI（創価学会インタナショナル）運動は、こうした仏教の平等思想を一つの理論的基盤としている。ブツダの平等思想と、とくに「法華経」にみられる「万人の成仏」、すなわち万人の平等の思想は、SGIの民衆運動の理論的根拠となっている。

そこで本日は、手短かな報告にはなるが、SGIの視点から見た仏教における平等思想を、「法華経」に焦点を当てて検討し、池田大作SGI会長の解釈を紹介したい。その解釈は、民衆運動の指導者としての立場から、理論だけでなく、実践の上から解釈しているところに特質が見られる。その際、同じくSGIの仏教思想の基盤となっている日蓮の「法華経」解釈についても言及する。そうするなかで、SGI会長は、「法華経」に示された智慧、洞察を、現代に生きる人々にふさわしく蘇らせていることを示したい。

## 2 二乗作仏——方便品第二

「法華経」に説かれる三大思想として、「万人の成仏」、「永遠なる仏」、「菩薩道の実践」があげられる。そのうち、

平等思想を示すのが「万人の成仏」の概念である。「法華経」においては、一切衆生が一念三千の当体であるとの考え方に立った「皆成仏道」の教えが説かれているのである。それはとくに、「方便品第二」に示されており、そこでは、今まで成仏できないとされていた二乗声聞・縁覚の成仏が示されている。さらに、「提婆達多品第十二」では、諸経典では成仏できないとされていた悪人と女人の成仏が示されている。

「方便品第二」に、「如来は但だ一仏乗を以ての故に、衆生のために法を説きたまう」（創価学会版『法華経並開結』以下、『法華経』と略記）、聖教新聞社、二〇〇二年、一二二ページ）とあるが、一仏乗とは、一切衆生を等しく成仏させる教法のことである。そうした立場から、『法華経』では、「二乗作仏」、「悪人成仏」、「女人成仏」が説かれているのである。

そこでまず、方便品にみられる二乗作仏についてみてみよう。二乗とは、十界の中の声聞界、縁覚界の衆生のことである。「乗」とは乗り物の意で、声聞や縁覚の人びと、あるいはかれらの立場を意味する。

方便品第二の冒頭には、「諸仏の智慧は甚深無量なり。其の智慧の門は難解難入なり。一切の声聞・辟支仏の知ること能わざる所なり」（『法華経』一〇六ページ）とある。辟支仏とは縁覚のことである。諸仏の智慧は計り知れないほど深く、理解し、悟るのは難しい。声聞・縁覚の二乗にはとうてい理解できるものではないのである。

このうち声聞は、譬喩品で次のように示されている。「舍利弗よ。若し衆生有りて、内に智性有り、仏世尊従り法を聞いて信受し、慇懃に精進して、速かに三界を出でんと欲して、自ら涅槃を求むる、是れを声聞乗と名づく」（『法華経』一七六ページ）。仏の法を聞いて、苦・集・滅・道の四諦の道理を会得して、涅槃を目的として修行する人々である。

次に縁覚については、「若し衆生有りて、仏世尊従り法を聞いて信受し、慇懃に精進して自然慧を求め、独善寂を樂たがい、深く諸法の因縁を知る、是れを辟支仏乗と名づく」（『法華経』一七六ページ）とある。仏の法を聞くだけでなく、自然や事物などを通して、十二因縁など

の仏教の深い意味を悟る人々である。

これら二乗は、現世に対する執着を断つた「阿羅漢」ではあるけれども、現実逃避的、自己中心的であり、自己の解脱に執着して、利他の行に欠けるものとして非難された。かれらは大願も大慈大悲もなく、ただ老病死の苦から脱することのみを求めるとされる。いわゆる「二乗根性」である。<sup>(5)</sup>そのため、二乗は成仏できないと非難されたのである。

しかし、「法華経」に至って、あらゆる衆生が成仏できるといふ「一念三千の法門」が説かれ、二乗も菩薩行をすることによって、成仏の記別が与えられた。それが一仏乗の教えである。従来は、声聞の人には声聞乗が説かれ、縁覚には縁覚乗の教えが説かれ、菩薩のためには大乘の經典が説かれたという「三乗」の教えに対して、それは方便であったとし、「法華経」で一乗が説かれているのである。

一乗とは、一つの乗り物の意味で、乗り物とは衆生を仏の悟りに導いて行く教えをたとえたものである。この乗り物によって、一切衆生がひとしく仏に成るこ

とができると説いている。一乗は、「般若経」「華嚴経」「勝鬘経」などに散説されているが、これをもっとも力説しているのは「法華経」である。

方便品には、「十方仏土の中には 唯一乗の法のみ有り 二無く亦た三無し 仏の方便の説を除く」(「法華経」二九ページ)とある。通常、この「二」は声聞・縁覚の二乗、「三」は声聞・縁覚・菩薩の三乗をさし、二乗あるいは三乗の差別を否定してそれらを統一したものが一乗であると解されている。天台・華嚴はこの考えに立つが、この点の解釈をめぐって中国では三車家・四車家の論争があった。

一乗の直接の語義は「唯一」であるが、内容的には「統一」の意味を持ち、後者の点をとくに力説したのが「法華経」であるとされる。「法華経」では、教法のみならず修行者の人格も統一されるべきものとして、声聞・縁覚の成仏が説かれているが、これはこの経独自の教えであるとされる。天台宗においては、「会三歸一」、「開三顯一」、「開會」等の言葉で統一の教義を表現しているが、菅野博史はそれを「三乘方便・一乘真實」と呼んで

いる。<sup>(6)</sup>

こうした思想を、ブツダは「法華経」にいたってはじめて説いた。「四十余年未顕真実」であったが、衆生の機根が熟してきたので、ようやく説いたとされるのである。平川彰は次のように指摘している。「どういう人でも平等に仏の慈悲にあずかれる、という教えが法華経に示されているわけです。『四十余年未顕真実』という言葉がありますね。つまりお釈迦さまが悟りを開かれてから四十余年間、民衆を救うための教えを説こうという気持ちはあったが、いまだそれを説くのが早かった。四十年過ぎて、人々の心がようやく熟してきて、法華経を聞く準備ができてきた。ここで自分が本当にこの世の中に現われてきた目的、出世の本懐を示すのだ、と言われるのが法華経なのです」<sup>(7)</sup>

さて方便品では、舍利弗がブツダに説法を三回、請うが、ブツダはそれを制止し、三回目をやつと説き始める(「三止三請」)。その時、五千人の増上慢の僧尼や信者が座を立っていってしまう(「五千起去」)。「此の語を説きたまう時、会の中に比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷

の五千人等有りて、即ち座よ從り起ちて、仏を礼して退きぬ」(『法華経』一八〇九ページ)。しかしブツダは、それにかまわず黙つて去らせ、説法を始める。

これらの状況について、『法華経の智慧』では次のように述べられている。

「そして、その『仏の出現の唯一の目的』である『偉大な仕事』の内容が、『開・示・悟・入』の『四仏知見』として明かされます」

「衆生の仏知見(仏界)を開かせるということは、衆生に仏知見がそなわっているということです。仏知見があるのは、衆生が本来、仏だからです。つまりこれは『衆生こそ尊極の存在なり』という一大宣言なのです」

「いわゆる『三乗方便・一乘真実』ということですね」<sup>(8)</sup>

そして、「『一乗』とは、唯一の教え」という意味です。

仏の唯一の教えは、仏に成るための教えなので『仏乗』とも『一仏乗』とも言います。これには、仏自身が乗ってきた乗り物という意味もあると考えられます。仏自身が歩んできた道を教え、仏自身が乗ってきた乗り物を与えるのが一乗(9)です」と解釈されている。

そして、二乗作仏については、「要するに、仏の教えは『一仏乗しかない』と、はっきり言うことは、一切衆生が菩薩であると示すことになる。二乗も菩薩であり、仏に成れるのです。人開会は、一乗の教えがすべての衆生を成仏させることを強調するものです。その要が法華経の『二乗作仏』です」<sup>(10)</sup>。

このように、SGI会長は、二乗作仏を万人の成仏における重要なポイントと考えている。さらに、それを悟った二乗の心境に言及している。すなわち、対談者の「釈尊は『大乘平等の法』と呼んでいます、こうした、『最高の法』『最高の生き方』を知った二乗の喜びは、どれほどだったでしょうか」「経文では、舍利弗は歡喜のあまり思わず躍りあがって、釈尊に向かって合掌したと説かれています」「法華経によって蘇った『声聞』の姿ですね」とのコメントに対して、SGI会長は次のように応じている。

「根底から一念が変わったのです。そして舍利弗は、一仏乗を納得してこう告白しています。『今、仏から未曾有の法を聞いて、すべての疑いや悔いがなくなり、

心身ともに安穩になりました。今日はじめて知りました。自分は真の「仏子」です。仏の口から生まれ、仏の教化から生まれたのです』と。この『仏子』という言葉は、大乘では菩薩を意味します。舍利弗は一仏乗を信解して、声聞から菩薩に生まれ変わったのです」<sup>(11)</sup>。

さらに、「多くの菩薩たちが声聞・縁覚となって、多くの衆生を教化するのである。彼らは、内に菩薩の行を秘め、外には自分は声聞であるという姿を見せている。生死の輪廻を厭うなど、いかにも声聞らしくしているけれども、実は、自ら仏の国土を浄めているのである(趣意)」の文に対して、池田SGI会長は、「あなたがたは自分を声聞だと思っているけれども、実は『菩薩』なのです。あえて声聞の役を演じながら、人々を仏道に向かわせているのですよ——こう教えているのだね」<sup>(12)</sup>と指摘し、本来は菩薩なのだけでも声聞の姿をとって生きているという、逆転の思想に言及する。声聞の姿は表面的なものであり、実はすべてが菩薩なのであると。

さらにSGI会長は、日蓮の次の文を引用して、人

間の生き方に即して論じる。すなわち、「大聖人は『二乗を永不成仏と説き給ふは二乗一人計りなげくべきにあらざりけり我等も同じなげきにてありけりと心うるなり』<sup>(13)</sup>と仰せです。

そして『人の不成仏は我が不成仏、人の成仏は我が成仏・凡夫の往生は我が往生』<sup>(14)</sup>という考え方を示されている。

十界互具になる前は、他の衆生のことは、あくまで他人ごとであった。それが十界互具になって、人の成仏は自分の成仏、人の不成仏は自分の不成仏と受け止めていく生き方に転換している。これは生命観、世界観の大変革です。

『他人だけが不幸』はありえない。『自分だけが幸福』もありえない。他者のなかに自分を見、自分のなかに他者との一体性を感じていく——『生き方』の根底からの革命です。

すなわち、人を差別することは、自分の生命を差別することになる。人を傷つければ、自分の生命が傷つく。人を尊敬することは、自分の生命を高めることになる。

……『權教は不平等の経なり、法華経は平等の経なり』<sup>(15)</sup>と大聖人は仰せです。法華経は、単なるスローガンとしての平等ではなく、生命の法理のうえから、そして『生き方』の根源から、自他共の幸福への道を教える經典なのです<sup>(16)</sup>と解釈するのである。

このように、SGI会長は、他者とともに、他者のために生きるという人間の理想的生き方は二乗にも可能だとし、二乗の生命の革命的転換の可能性を強調している。二乗作仏により、利己的な二乗が新たな生き方にめざめ、前進していくことが明かされたのである。

現代においても、象牙の塔や蝟壺に立てこもり、社会と関わりとうとしない学者や、現実世界と隔絶した場所で孤高の制作活動をする芸術家も多い。しかし、一方で、そうした能力を他者のため、社会のために用いていこうとする人たちもいる。ちなみに、池田SGI会長と対談を行なう識者の多くは、行動する学者、芸術家が多い。「二乗根性」を突き抜けた、現代における菩薩といえようか。SGI会長は、二乗作仏に、真実の法に目覚め、生き方をダイナミックに転換した人

間像を見出していると思われる。

### 3 悪人成仏——提婆達多品第十二

次に、悪人成仏と女人成仏が説かれている提婆達多品第十二をみてみよう。この品は、鳩摩羅什訳の「法華経」には入っていないなど、成立についてはさまざまな説があるが、今回はふれない。

仏教における悪人とは、五逆罪（父を殺す・母を殺す・阿羅漢を殺す・仏身より血を出す・和合僧を破る）、十悪（殺生・偷盗・邪淫・妄語・綺語・悪口・両舌・貪欲・瞋恚・愚癡）等の悪業や正法誹謗を重ねるものとされる。そのような悪人でも、「法華経」に縁すれば、最後には成仏ができると説かれるのが「悪人成仏」である。

提婆達多品では、ブツダに対する三逆罪（仏身より血を出す・和合僧を破る・阿羅漢を殺す）を犯した提婆達多が、「提婆達多品第十二」で天王如来の授記を受け、成仏することが示されている。提婆達多については、その出自など諸説があるが、一般に次のような人間として知られている<sup>(1)</sup>。

——斛飯王の子で阿難の兄、または甘露王の子で阿難の弟とする説もあり、釈尊の従弟にあたる。提婆、調婆達、調達とも音写する。訳して天熱、または天授ともいう。……幼いころから釈尊に敵対し、釈尊から与えられた白象を打ち殺したり、耶輸大臣の娘、耶輸陀羅姫を争って敗れたりした。後に釈尊は出家して仏となり、提婆もまた出家して弟子となった。

しかし憍慢な心の持ち主で名聞名利の念が強く、釈尊から大衆の前で叱責されたのを恨み、退転して新教団を作り、釈尊の殺害をはかるなど三逆罪（破和合僧・出仏身血・殺阿羅漢）を犯した。更に外道の邪師、富蘭那外道と結託し、悪事を働いて悔いるところがなかったという。

また阿闍世太子を唆し、父頻婆娑羅王を殺させて王位に即位させ、釈尊に敵対させた。また、あるときは爪に毒をつけ、釈尊の足にその爪の毒を塗り、傷つけて殺そうと企てて王舎城へいったが、蓮華比丘尼から責められて怒り、打ち殺した。その後、王舎城北門の提婆の立っていた大地が裂け、生きながら阿鼻大城

に堕ちたという。

釈尊の弟子となりながら退転して、逆罪を犯し、釈尊を迫害した悪比丘とされるが、法華経提婆達多品第十二では提婆達多は釈尊の因位の修行の師であり、無量劫の後、天王如来となるであろうと記別を与えている――。

このように、悪逆の限りをつくしたとされる提婆達多であるが、実はそれほど悪人でもなかった、あるいは悪人とは考えられていなかったという説もある。「法華経」の中にも、彼が大悪人であったということは述べられていない。この文にあるように、過去の師匠として述べられているのみである。すなわち、

「仏は諸々の比丘に告げたまわく、

『爾の時の王とは、則ち我が身是れなり。時の仙人とは、今の提婆達多是なり。提婆達多は善智識なるに由るが故に、我れをして六波羅蜜・慈悲喜捨・三十二相・八十種好・紫磨金色・十力・四無所畏・四摂法・十八不共・神通道力を具足せしめたり。等正覚を成じて、広く衆生を度するは、皆な提婆達多の善知識に因るが

故なり』と。

諸の四衆に告げたまわく、

『提婆達多は却かへつて後、無量劫を過ぎて、当に成仏することを得べし。名づけて天王如来……』(『法華経』三九九―四〇〇ページ)。

この点について、平川彰は、次のように指摘している。

「提婆達多がそんな悪人だったということは、お釈迦さまの時代には言われなかったのです。……教団の分裂が起ころうようになってから、提婆の教えを非難するようになったのではないのでしょうか。なぜだ、というのはよく判りませんが、教団を分裂させないように、教団を分裂させた提婆達多を悪者にする、という考えが起こったのではないかと思います<sup>(18)</sup>」

また、菅野博史も、「今となつては、『提婆達多の』個々の伝説の真偽を決定することはできない」とし、「提婆達多品には案に相違して、このような大悪人であることはまったく記されていない。中国・日本では、『法華経』は悪人成仏を説くといわれたが、それは提婆達多が悪人であるという固定観念に基づく。大悪人の提婆達多

でさえ『法華経』によって救済されるという解釈である。……提婆達多が悪人であることは当時周知の事実であったから、あえて触れなかったのであろうか」と指摘している。<sup>(19)</sup>

そうした指摘をふまえながらも、池田SGI会長は、提婆達多に即して、悪人が成仏できるということの意味を実践的な角度から深く掘り下げている。ふたたび、『法華経の智慧』をひもといてみよう。

提婆達多品を検討する箇所では、対談者が次のように述べる。

「提婆達多は、まさに『悪役』の代表ですね。『悪逆の提婆』と呼ばれ、悪いと言えば、こんなに悪い人間もいません。その『大悪人』が成仏するというのが、法華経の提婆達多品です。ある意味で、これほど不思議な法門はないかもしれません」

「提婆品では、この『悪人成仏』とともに、竜女の成仏という『女人成仏』が説かれています。悪人も女人も、それまでの仏教では、仏に成れないとされてきました。いわば常識をくつがえす説法であり、一切衆生を成仏

させるという、法華経の特長が劇的に表現されている品といえます」<sup>(20)</sup>

それに対し、SGI会長は、「この品に即身成仏が説かれていることがポイントです。『あらゆる人を成仏させるのだ』というのが法華経の心です。人々にとって法門以上に切実なのは、自分が成仏できるかどうかということです。提婆品は、まさにその問題に端的に答えを示している。

釈尊の殺害を図り、教団を分裂させた極悪人の提婆達多。また世間から差別されてきた女性であり、その上、畜生の身である竜女。この二人は当時の常識からすれば、成仏からもっとも遠いと考えられていた存在でしょう。その提婆と竜女でさえも成仏できると説くことは、この世で成仏できない存在はないということを示しています」<sup>(21)</sup>と応じている。

ここには、SGI会長が、仏教本来の平等思想を徹底させた「法華経」の卓越性を高く評価していることがうかがわれる。

SGI会長は、さらに展開して、性善説でも性悪説

でもない十界互具の立場から、この問題に論及する。

すなわち、「悪もまた善を顕す働きをするのであれば、悪の全体がそのまま善になります。まさに善悪不二です。しかし、自然のままに放置していて、悪が善にな

るのではない。悪と戦い、完膚なきまで打ち勝って、はじめて善悪不二となるのです」とし、「その意味で、提婆品の『悪人成仏』とは、釈尊による『善の勝利』の偉大な証明です。勝利宣言です。その『勝者』の境涯の高みに立ってはじめて、提婆が過去の善知識であり、自分の師匠であって、今世で自分の化導を助けてくれたのだと言えるのです。……

『生命の真実』であると言えるでしょう。提婆達多も、生命の真実の姿においては、善悪不二です。無明と法性が一体の妙法の当体です。釈尊が師とした過去世の提婆達多とは、じつは、この妙法そのものだったと言えるのです。

……釈尊も根源の妙法を師として成仏しました。そのことを提婆品では、釈尊が過去世に阿私仙人を師匠として修行し、成仏したという表現で示したと考えら

れます。……

悪知識をも善知識に変えるのが妙法の方であり、苦悩をも喜びに変え、追い風に変えるのが信心の一念の方です。提婆品は、このことを教えているのです。

日蓮大聖人は、『釈迦如来の御ためには提婆達多こそ第一の善知識なれ、今の世間を見るに人をよくなすものはかたうど<sup>方</sup>よりも強敵が人をば・よくなしけるなり<sup>(22)</sup>』——釈迦如来の御ためには、提婆達多こそ第一の善知識である。今の世間を見ると、人を立派にしていくのは、味方よりもむしろ強敵が人を立派にしていくのです——と言われている。

成仏するには『内なる悪』に勝利しきらなければならぬ。そのためには具体的には『外なる悪』と戦い、勝たねばならない。悪と戦うことよって、生命が鍛えられ、浄められ、成仏するのです。極悪と戦うから、極善になるのです。自分の生命を鍛え、成仏させてくれるという本質論から見たときには、その極悪も師匠とさえ言えるのです。

ゆえにポイントは、極悪の提婆達多をも過去の師匠

なり、と説く釈尊の『大勝利の境涯』にあります。勝ったからこそ、そう言えるのです。勝ったからこそ仏なのです<sup>(23)</sup>と。

そして、対談者が、「本来、一切衆生の誰もが平等に成仏できる、というのが法華経全体の心ですから、悪人であった提婆達多だけを成仏から除外することは、むしろ矛盾になってしまふ。法華経の精神からすれば、提婆達多への授記は必然であるといえます」「考えてみれば、提婆達多と同じような悪の生命は、誰の中にもあるわけですから、悪を具している者が成仏できないというのであれば、誰も成仏できないことになってしまいます。つまり、悪人の成仏・不成仏は悪人だけの問題ではない。じつは一切衆生の問題だったわけです。これは前に二乗の成仏のところでも論じたところですが」と問うと、SGI会長は、次のように応じている。

「十界互具の法理とは、いわば仏の中にも悪があり、悪人の中にも仏性があるということです。それを端的に示したのが提婆達多の成仏です。だから提婆達多の

成仏が説かれなければ、法華経は完結しないともいえ  
るでしょう<sup>(24)</sup>」

このように、池田SGI会長は、提婆達多の成仏を通して、善悪不二を論じ、悪を打破ってこそ善が現われることを示している。次元は異なるが、これは個人における闘争のみならず、社会全般にも適用可能な視点であろう。SGI会長は、現代社会に「悪のエネルギー」が充滿していることを指摘し、「善のエネルギー」を高めていくことの重要性を提唱しているのである。

#### 4 女人成仏——提婆達多品第十二

最後に、「法華経」における「女人成仏論」について一瞥してみよう<sup>(25)</sup>。大乘仏教が成立した時代には、仏教も『マヌ法典』に代表される当時の女性蔑視的な社会通念を色濃く反映するようになる。それは、「女人五障説」の立場から女人成仏が強く否定されたことや、女性の罪業が強調されたことにつなががられる。

しかし、そうした中でも、女性蔑視・排除を乗り越えようとする経典が出現する。その代表が、「法華経」

の「提婆達多品第十二」等で、ここでは、海の底に住むサーガラ竜王の八歳の娘である竜女が悟りを得たことが述べられている。

その際、舍利弗が「女人五障説」に立ってそれに疑いをさしはさむ場面が興味深い。

すなわち、「汝は久しからずして無上道を得たりと謂えり。是の事は信じ難し。所以は何ん、女身は垢穢にして、是れ法器に非ず。云何んぞ能く無上菩提を得ん。仏道は懸曠なり。無量劫を逡て、勤苦して行を積み、具さに諸度を修し、然る後に乃ち成ず。又た女人の身には猶五障有り。一には梵天王と作ることを得ず。二には帝釈、三には魔王、四には転輪聖王、五には仏身なり。云何んぞ女身は速やかに成仏することを得ん」〔法華経〕四〇八ページ〕と。

すると竜女は、ブツタに宝珠を献上し、「当時の衆会は、皆な龍女の忽然の間に、変じて男子と成つて、菩薩の行を具して、即ち南方の無垢世界に往きて、宝蓮華に坐して、等正覚を成じ、三十二相・八十種好あつて、普く十方の一切衆生の為めに、妙法を演説するを見る」

〔法華経〕四〇九ページ〕と。光明で十方を照らして教えを説く姿に、舍利弗をはじめとする一同の人々が納得したという。

こうして、諸経典において忌避され、資格を剥奪され、成仏を拒否されていた女性が、成仏の道を示されたのである。これは画期的なことであり、女人成仏ということと『法華経』が真つ先にあげられるゆえんである。

SGI会長は、『法華経の智慧』において、『法華経』における竜女の成仏についてくわしく論じている。まづ端的に、「提婆達多品の竜女の話は、……女性を差別する思想に対して、実証をもって、それを打ち破つた『大いなる人権宣言』なのです」<sup>(26)</sup>と述べ、具体的には、日蓮と同じく、一念三千の法理にのっとつて、竜女の成仏について解説を加えている。

すなわち、「だれもが『性得の宝珠（仏性）』をもっている。一切衆生が平等に『宝珠』を生命にもっているのです。そう見るのが十界互具であり、一念三千であり、法華経です。十界の中には畜生界もある。竜女は畜生ですが、当然、畜生界にも仏界が具わっている。しかし、

差別観にとらわれた目には、それが見えない。生きとし生けるものに仏界を観る法華経です。女性への差別など、微塵もありようがない。女性は成仏できないなどというならば、それは一念三千ではありえない。一念三千を否定するならば、自分自身の成仏もない。ゆえに、童女の成仏は、全女性の成仏を表すだけでなく、じつは男性の成仏をも表しているのです<sup>(27)</sup>。

さらに、「本来、仏教は、生きとし生けるものを、ひとつの黄金の大生命の個々の現れと観る。それが釈尊の悟りです。それを『縁起』とも言い、『空』とも言い、『妙法』とも言うのです。その悟りの眼から見れば、男女間の上下の差別など、ありえない<sup>(28)</sup>」と指摘している。

そして、童女成仏についての結論として、「女性だから女性の苦しみがわかり、女性を救っていきける。女性として苦しんだ分だけ、人を幸福にできる力となる。それが妙法の力です。また、それが童女成仏です。畜身で女性で年少で——一番、低く見られていた童女が一番早く『即身成仏』した。そこに意味がある。ともあれ、しいたげられた差別社会のなかで、童女成仏は万感の

思いを込めた『人権宣言』だったと言えるでしょう。……法華経に基づく『女性の人権宣言』は、一人一人がだれよりも幸福になることが根本です。一人の犠牲もなく、一人一人が童女のごとく、生死海の大海のなかで『苦の衆生』を救いながら、自他ともに絶対の幸福境涯の航海をしていくのです。女性は幸福になつてもらいたい。ならねばならない。それが法華経の心です<sup>(29)</sup>」と結んでいる。

このように、仏教思想の中に男女平等思想を見出す池田SGI会長は、折にふれて女性たち呼びかけ、人間としての自立と自己実現を促すとともに、地域へ、社会への貢献を促している。

そうした期待を受けた多くの女性たちが、女性ゆえに受ける差別や不公平な状況に果敢に挑戦し、人間として悠然と自己実現と社会貢献の道を歩んでいることは、広く知られている。

## 5 おわりに

日蓮は、「法華経」における平等思想に着目し、次の

ように述べている。

「権教は不平等の経なり、法華経は平等の経なり。今日蓮等の類いは真実自証無上道・大乘平等法の行者なり、所謂南無妙法蓮華経の大乗平等法の広宣流布の時なり」<sup>(30)</sup>、「凡此の経は悪人・女人・二乗・闍提を簡はず故に皆成仏道とも云ひ又平等大慧とも云う、善悪不二・邪正一如と聞く処にやがて内証成仏す故に即身成仏と申し一生に証得するが故に一生妙覚と云ふ、義を知らざる人なれども唱ふれば唯仏と仏と悦び給ふ」<sup>(31)</sup>と。

また、「法華経を持つ男女の・すがたより外には宝塔なきなり、若し然れば貴賤上下をえらばず南無妙法蓮華経と・となうるものは我が身宝塔にして我が身又多宝如来なり」<sup>(32)</sup>。

このように、日蓮は、「法華経」にもとづき、一切衆生は等しく妙法の当体であり、男女、貴賤の区別なく成仏できることを強調する。二乗であれ、悪人であれ、女性であれ、どんな立場にあれ、「法華経の行者」であれば平等に成仏の可能性があるのである。「法華経」は、差別される存在すべてに対する救いの経典であると理

解したのである。

現代社会において創立され、発展してきたSGIは、ブツダ、「法華経」、日蓮にみられる「平等思想」を基盤とし、人種、民族、性別、職業、出自などの属性にとらわれず、多様な人々を主体者として活動を展開してきた。「桜梅桃李」の理念のごとく、さまざまな人々が各々の「仏性」を顕現し、自分らしく、自己実現と社会貢献の活動に邁進しているのである。

池田SGI会長は、その著作やスピーチにおいて、繰り返し仏典や日蓮の遺文に言及し、仏教が本来、平等思想に立っているととらえ、それらから深い洞察と指針を汲み出し、現代的に展開あるいは再解釈し、社会に発信しているのである。

最後に、『法華経の智慧』からの言葉を引用して結語としたい。

「すべての民衆を救うために説かれた仏法です。女性と男性に差別はない。出家と在家の違い、人種、学歴、あるいは権力、経済力など、どんな社会的立場も関係ない。当然のことです。

仏法は、だれのために説かれたか——むしろ差別され、虐げられ、最も苦しんだ人々をこそ、最も幸福に輝かせていく。それが仏法の力であり、法華経の智慧ではないだろうか<sup>(33)</sup>

「仏とは自らの生命の真実を悟った人である。それは、とりもなおさず、あらゆる人の生命の真実を悟ったことでもあった。それが仏の智慧であり、法華経の智慧です。

その意味で、法華経がだれのために説かれたのかといえ、『すべての人間のため』であり、その『自立』のためです。そこには当然、僧俗、男女、貧富、貴賤、老若等、いかなる差別もありません。ひとえに『人間のため』『民衆のため』です<sup>(34)</sup>

「だれもが等しく、成仏の可能性をもっている。だれもが必ず、絶対の幸福境涯を満喫していける——これが法華経の教えなのです<sup>(35)</sup>

仏教史を貫く平等思想を、現代に生きる人々にふさわしい形で再解釈し、展開し、さらに行動に移している、いわば『法華経』を現代によみがえらせているのがSG

I会長の思想と活動であるといつてよいだろう。

注

(1) 中村元訳『ブツダのことは スッタニパータ』岩波文庫、一三五ページ。

(2) 同書、一四〇ページ。

(3) 中村元訳『ブツダ 神々との対話 サンユッタニカーヤ I』二一五―一六、岩波文庫、七四ページ。

(4) 菅野博史『法華経入門』岩波書店、二〇〇一年、四六ページ。

(5) 久保田正文氏は、「二乗根性」をめぐり、次のように述べている。「この声聞と縁覚との心の持ち方は、二乗根性といわれて、法華経においては、望ましくない人間類型とされているのである。それはなぜかというところから、人間の世の中は汚れた所であると思つていながら、人間の世の中は浄土という所は、人間の現実世界すなわち娑婆とは、別の所にあると思ひ込んでいる。この人間の現実世界は厭うべき所であるから、自分だけはこの苦しい世を捨てて、願わしき浄土へ行こうと思つている。このようにあることが人間としての無上の幸福であると、このように教えているのが仏教であると思ひ込んでしまつてゐる。

ところが、法華経によると、この世の中が苦しいか

- らと言つて、自分だけよい所へ行きたいなどという心を持つている間は、真の幸福は得られないのである。……肉体の規制を受けている人間が、そのままでも悟りに向かい、涅槃という最上の幸福に入ることができるのである。言葉をかえて言えば、迷いとか煩惱とか呼ばれる人間現象を媒介としなければ、菩提とか涅槃とか呼ばれるものは存在し得ないのである。これこそ我々凡夫も、仏となる理想を持つことができるのであろう。このことを教えるのが、仏がこの世に出現したただ一つの目的であると説くのが法華経の根本精神であるからである」。久保田正文「法華経の課題」、久保田編『法華経入門』日新出版、一九六六年、一五三ページ。
- (6) 菅野博史、前掲書、四六〇―四七二ページ。
- (7) 平川彰・望月良晃『法華経を読みとく』上、春秋社、二〇〇〇年、四〇五―四一七ページ。
- (8) 池田大作・斎藤克司・遠藤孝紀・須田晴夫『法華経の智慧』第一巻、聖教新聞社、一九九六年、一四六―一八七ページ。
- (9) 同書、一七六―一七九ページ。
- (10) 同書、一七九―一八〇ページ。
- (11) 同書、一九〇―一九二ページ。
- (12) 同書、一九三―一九五ページ。
- (13) 『日蓮大聖人御書全集』創価学会、五二二―五二四ページ。
- (14) 同書、四〇一―四〇二ページ。
- (15) 同書、八一六―八一九ページ。
- (16) 前掲『法華経の智慧』第一巻、一八七―一八八ページ。
- (17) ここでの提婆達多についての記述は、仏教哲学大辞典編纂委員会編『仏教哲学大辞典』（新版）、創価学会、二〇〇〇年、による。
- (18) 平川彰・望月良晃、前掲書、二二三―二三四ページ。
- (19) 菅野博史、前掲書、一五二―一五三ページ。
- (20) 池田大作他『法華経の智慧』第三巻、聖教新聞社、一九九七年、八三―八四ページ。
- (21) 同書、八四―八五ページ。
- (22) 『日蓮大聖人御書全集』創価学会、九一七―九二〇ページ。
- (23) 前掲『法華経の智慧』第三巻、一〇一―一〇四ページ。
- (24) 同書、一〇六―一〇七ページ。
- (25) このテーマについては、拙稿で論及したことがある。「仏教史における女性の問題——日蓮の女人成仏論を中心に」『東洋学術研究』第四一巻第一号、二〇〇二年、同「二十一世紀は女性の時代——仏教と女性」『東洋学術研究』第四三巻第二号、二〇〇四年、などを参照のこと。
- (26) 前掲『法華経の智慧』第三巻、一一四―一一五ページ。
- (27) 同書、一一一―一一二ページ。
- (28) 同書、一二九―一三〇ページ。
- (29) 同書、一五四―一五五ページ。
- (30) 『日蓮大聖人御書全集』創価学会、八一六―八一七ページ。
- (31) 同書、四一六―四一七ページ。

- (32) 同書、一三〇四ページ。
- (33) 前掲『法華経の智慧』第一巻、六〇ページ。
- (34) 同書、六四ページ。
- (35) 同書、六六ページ。

(くりはら としえ／東洋哲学研究所主任研究員)